

報 特 攻

平成14年11月

第53号

〒105-0001 東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090
FAX 03(3432)5567

編集人 田中賢一
発行人 木村元正

特攻観音年次法要



式次第

(開始14:00)

(敬称略)
司会 乗兼 英史

- 1 梵鐘点打 三回 伊藤 直之
- 2 大衆着座
- 3 式衆入道 金龍山浅草寺一山大導師
清水谷考尚大僧正 猊下
- 4 国歌斉唱 一回
- 5 山主願文 特攻平和観音経
世田谷山観草寺住職 大田 賢照
- 6 読経 清水谷考尚大僧正 猊下 他
- 7 祭文 特攻平和観音奉賛会
会長 瀬島 龍三
- 8 追悼の辞

ご遺族代表 第一回天隊
故猪熊房蔵少尉弟 猪熊 得郎

戦友代表

- 9 献吟 陸士57期 元石腸隊員 吉武登志夫
吟 石橋一歌 他
- 10 ラッパ献奏 海軍軍装会ラッパ隊
笛 逢坂 竜信
- 11 焼香 特攻平和観音奉賛会
会長 瀬島 龍三

ご遺族
来賓各位
会員・一般各位

- 12 式衆退堂
- 13 池前にて読経後式衆退場
- 14 直会 15時〜16時30分



遺族 52名 43組
参列者 来賓 30名
会員 198名

目次

特攻観音年次法要 1

特攻隊員の遺書遺詠にみる靖国神社 3

原町飛行場関係戦没者慰霊祭 8

追悼 飯野伴七君・松本武仁君 10

松本武仁君の絵 11

特攻隊員の終戦 空挺隊員の部 15

戦没空挺隊員の御霊の在すところ 24

祭文

第五十一回、特攻平和観音年次法要に当り、謹んで特攻隊烈士諸霊に申し上げます。戦い終ってから五十七年、またこの年次法要を営んでより、早や五十年が過ぎました。

過ぎし日の戦いに思いを馳せまするに、緒戦は華々しき戦果を挙げ得ましたが、時を経るに従って彼我の戦力差は如何とも致しがたく、戦局終熄間際の頃には残念ながら肉弾を以って敵に当らねばならぬ状況となりました。この時に当り、諸士は青春に充ち溢れた、その心と肉體とを、自ら擲って、美わしき祖国のため、敢然として敵機敵艦に体当り攻撃を加え、散華されたのであります。その心の内は、彼の本居宣長が詠じましたる歌

朝日に匂ふ山桜花
敷島の大和心を人間はば

歌そのものであります。これを思うとき、私達は肅然として襟を正し、また涙を禁ずることは出来ません。

戦後50年を振り返って見まするに、現今、教育の乱れ、家庭の崩壊、秩序の弛緩、等々眼を覆わしめるものが現出しております。この中において諸士の赫々たる勲しを現在に至るまで、われわれは微力ではあります語り継いで参りました。今後は次代を担う人々にこの心を継承し、歴史の断絶を防がねばならぬと心に、念じております。

最近に至り、若き人々が特攻隊の事績に目を向けつつあり、僅かなる数ではございますが、それらの人々を当財団の会員として迎えつつあります。今後とも凡ゆる機会、凡ゆる手段を通じて、特攻隊烈士の御心と、我々の志を伝えてゆきたいと深く心に刻んでおります。御霊よ、願わくば末永く見をなわし、またお導き給わらんことを

平成十四年九月二十三日
特攻平和観音奉賛会
財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
会長 瀬島 隆三

特攻観音年次法要に方り同憂の士に告ぐ

戦後の積弊茲に極まりて 老耄の安閑たる能わざるに到る 経済の復興を重視するの余り 金権万能の弊風 滔々として世を蔽い 節義を失いて久し 国政の衝にある者黄金臭噴々 党利党略私利私欲ありて 祖国あるを知らず 為に近隣諸国の軽侮を招く 国民大衆も亦己れありて国家あるを識らず 権利ありて義務あるを悟らず 教育勅語の精神地を払うにいたり 敗戦の毒五体に瀰延し 鮑魚の臭 自らこれを知らざるが如し 何によりてか かく無理想猥雑の世となりしか 他なし 戦後敵国の謀略により 歪曲せしめられたる教育にあり 教職にある者先ず洗脳せられ その階層の教育を受けたる者 今や社会の中枢を占むるに到る 嘗てお国の為一命を擲うちし我が国民精神 何処に失せたるや ここ特攻の靈廟に詣でて思へらく 特攻の烈士 後に続くを信ずれば 欣然として死地に投ぜしに非らずや かくばかり見にくき国となりたれば 逝きにし人の唯に惜しまる ある遺族は詠いしと聞く 慰霊とて低頭するのみにて何かあらん 我等残年僅かなり 咄 今や掉尾の勇を発し 照闇の火となりて 世を導かん

杖曳きてここに詣でる老耄の

嚮せあれ耿きこころを

「特攻」編集者 田中賢一

特攻隊員のこころ

誠心鐘を突く 嫺々とその響

清浄なる音色 特攻隊員のこころ

観音様を拜む 柔和な容貌

けがれなき姿 特攻隊員のこころ

池の中の観音 屹立した姿

動く事のない 特攻隊員のこころ

観音堂の木々 鳴く蝉の声

幼い頃の思出 特攻隊員のこころ

観音経を誦す 心を空しくし

きこしめすか 特攻隊員のこころ

はなのうてな 合わす掌たなごころ

届くか我が思 特攻隊員のこころ

幽明の境消え 臉に浮かぶ君が面

何事を語るか 特攻隊員のこころ





同期の桜を歌う会

特攻隊員の遺書遺詠にみる靖国神社

「声なき声」という言葉がある。私たちは和氣清麿公のように、神様のお告げを承ることはできない。しかし、英霊が書き残されたものや、その行動を拝察することによって、英霊の御心は那邊にあるか知

ることができる。それが「英霊の声なき声」である。

現下国政に携る者、英霊の声なき声にもとること甚しく、いたずらに年を過せば、祖国の前途に危懼はつるばかりである。ここに連ねる短文、私たちの心情を吐露し、世に訴えるものである。

——戦死したら靖国神社に祀られ、祭事は国で手篤く行われるものと、誰もが信じていた——

毎年四月の第一土曜日に靖国神社境内大村益次郎銅像の前で、「同期の桜を歌う会」の行事が行われている。

「貴様と俺とは同期の桜 離ればなれに散らうとも花の都の靖国神社 庭の梢で咲いて会おう」。歌っているのとジーンと熱くなるのを感じるのは、私だけではないようだ。見れば戦後の若い人も感激を込めて歌っている。戦後五十余年、この歌は純正日本人の琴線に触れるものがある。

靖国神社、そして桜、英霊の御心に深く刻み込まれていたからこそ、未だに日本人の心を打つ。

よしや身は千々に散るとも来る春に
また咲き出でん 靖国の宮

義烈空挺隊 関三郎軍曹

英霊の遺書や遺詠は沢山残っているが、その中で必ず死ぬときまっている特攻隊員のもものが比較的多いのは当然である。ここに、それらの中から靖国神社に係わるものを拾ってみる。

「特攻基地第二国分の記」より

沖繩作戦時鹿兒島県溝辺町十三塚原（現在の鹿兒島空港）に在った海軍特攻基地の記録

宮内 栄少尉 飛行予備学生出身 22歳

第三草薙隊 4月28日出撃

父母宛の遺書の一節

——折がありましたら、靖国神社で待っておりますから、面会に来て下さい。

島 澄夫少尉 飛行予備学生出身 25歳

第三八幡護皇隊 4月16日出撃

弟宛の遺書的一端

——達夫・広昭、俺は一足先にゆく、二人とも早晚後に続くのを信ず、二人のくる迄靖国神社で首を長くして待っているぞ。

時任正明少尉 飛行予備学生出身 25歳

第一草薙隊 4月6日出撃

父母宛の遺書の一節

——正明、桜花咲く靖国の社、智三人の兄上の許に、そして親友松本峯一の居る所に一足先に行きます。

靖国神社発行「英霊の言乃葉」より

植村眞久少尉 飛行予備学生出身 25歳

神風特別攻撃隊大和隊

19年10月26日比島海域に出撃

愛児への便りの一節

——お前が大きくなって、父に会いたい時は九段へ

いらっしやい。そして心に深く念ずれば、必ずお父様のお顔がお前の心の中に浮かびますよ。

永尾 博中尉 飛行予備学生出身 22歳

第三草薙隊 20年4月28日出撃 沖繩近海

父母宛の遺書の一節

— 父さん 大事な父さん 母さん 大事な母さん 永い間色々とお世話になりました。好子、寿子をよろしくお願ひ致します。

靖国の社頭でお目にかかりませう。では参ります。お身体お大事に。

米津芳太郎少尉 少候24期 26歳

富嶽隊 19年11月13日出撃 ルソン島東方洋上

母宛の遺書の一節

— 親に先立つ不幸をお許し下さい。さりながら大君の御楯として靖国の守護神になる芳太郎のご故母上もお欣び下さることゝ存じます。——

町田道教少尉 飛行予備学生出身 25歳

神風特別攻撃隊筑波隊 20年5月11日出撃

沖繩近海

母宛の遺書の一節

— それから若い盛りの綾子にもだいぶ苦勞をかけた。化粧もせず、着物もきず、たゞ家の為に働いてくれるのを思うと全く頭が下ります。よい婿さんを見つけてやって下さい。サエ子ちゃんもよい子になるようお願ひ致します。私も靖国神社からそれを祈って居ります。

松尾巧一飛曹 乙飛17期 20歳

神風特別攻撃隊第三御楯隊

20年4月7日出撃 沖繩近海

両親宛の遺書の一節

— 私の小遣が少しありますから、人に頼んでお送り致します。何かのたしにして下さい。

近所の人々、親族、知人、小学校時代の先生によろしく、妹にも……

後はお願ひします。では靖国へまいります。

昭和二十年四月六日午前十一時書

小川 清少尉 飛行予備学生出身 24歳

神風特別攻撃隊第七昭和隊 20年5月11日出撃

沖繩近海

両親宛の最後の便りの一節

— 殊に母上様には御健康に注意なされお暮らし下さるよう、なお又、皆々様の御繁栄祈ります。清は靖国神社に居ると共に、何時も何時も父母上様の周囲で幸福を祈りつゝ暮らしております。

清は微笑んで征きます。出撃の日も、そして永遠に。

「都城疾風特攻振武隊」より

沖繩戦で都城飛行場から出撃した陸軍特攻の記録

田中 治伍長 少飛13期 20歳 第六〇振武隊

5月20日出撃

父宛の遺書の一節

— 永の御不孝平に御許し下さい。治は先に失礼致しますが、靖国の社頭より皆様の御健康を祈ります。

若杉正喜伍長 少飛15期 20歳 第六〇振武隊

5月4日出撃

靖国の桜となりて薫る日の

誇を胸に 秘めて飛び立つ

永島福次郎少尉 特操1期 22歳 第二六振武隊

6月21日出撃

遺筆の一端

— 靖国を安住の地と定めたり、我が心は静寂清明

— 靖国ノ御社ニ咲ク若桜

— 元氣日増に旺盛 唯 一日千秋の思ひにて出撃の日を待つて居ります。既に隊員五名悠久の大義に殉ぜらる。残る吾等 亦神鷲に続かん 飛機整備完了しだいなつかしの都城に転進 爆装完了 沖繩へ……

再び会うことやなし

何時の日靖国で会う事ならんや

西宮忠雄少尉 特操1期 23歳 第二六振武隊

6月21日出撃

遺筆の一端

— 靖国で共に飲まうか五色酒

— 花の都の靖国神社 酒豪 青年将校 一死元来不足

論

浜田 齊伍長 少飛14期 20歳 第一七九振武隊

6月22日出撃

父母宛の遺書の一節

— 齊は男子の本懐これに過るはなしと喜び笑って死にます。では次は靖国神社にて

「陸軍最後の特攻基地」より

沖繩戦に万世より出撃した陸軍特攻の記録

大島 寛伍長 仙台乗員養成所 20歳

第七四振武隊 4月7日出撃

辞世

さくら さくら若桜

明日は九段の花と咲く

荒木幸雄伍長 少飛15期 18歳 第七二振武隊

5月27日出撃

最後の便りの一節

本日(廿七日) 出発します。

必ず大戦果を挙げます。

桜咲く九段で待っています。

どうぞ御身御大切に

弟達隣組の皆様に宣敷

瀬谷隆茂軍曹 仙台乗員養成所 20歳

第四三二振武隊 5月26日出撃

両親宛の遺書二通の一節

御両親様どうか何時までもいつまでもお元気で

皇国の為に御健闘下さい。では靖国で会う日を楽し

みに隆茂は征きます。

明日は戦友が待っている靖国神社に行く事が出

来るのです。日本男子と生れ本懐これに過ぎるもの

ありません。

お父さんお母さん、隆茂は本当に幸福です。では

又靖国でお会ひませう。待って居ます。

若尾達夫軍曹 古河乗員養成所 21歳

第四三二振武隊 5月26日出撃

同僚の遺品の中にあつた一文

松本兄、君とは古河、仙台、平安鎮といつとも一緒
だったね。愈々大望の特攻隊に召されて、これから
も亦死を共にする同じ隊とは……思えば山あり河あ
りの幾星霜、一緒に散らう、そして靖国でまた一緒
にならう。

花でさへ 潔よく散る若桜

大和男の子の俺達が

御国の為に 散るのなら

何の桜に負けやうぞ

日の本の 男に生れ光栄は

死して屍は帰らずも

魂永久に 靖国の

護りの神と我ならん

岸田盛夫伍長 少飛13期 21歳第六四振武隊

6月11日出撃

出撃前夜の手記の末尾

俺には靖国神社に弟が待っている。道案内を弟

に頼むんだ。羨ましかろう。

「知覧特別攻撃隊」より

沖繩戦に鹿児島知覧を出撃した陸軍特攻の記録

佐藤新平曹長 仙台乗員養成所 24歳

第七九振武隊 4月19日出撃

留魂録(日記)より

三月二十九日

同期も大分戦死とのこと、靖国神社の同期生会
に立派な武勇伝の一席、土産に出来る如く努力せむ。

四月一日

お母さんへ——あの時お母さんと東京を歩いた思
出は、極楽へ行つてからも、楽しいなつかしい思出
となることでしょうか。

あの大きな鳥居のあつた靖国神社へ今度新平が祭
られるのですよ……手をつないでお参りしましたね。

浅川又之少尉 幹候9期 23歳

第四三振武隊 4月6日出撃

兄宛の辞世の歌

桜花と散り九段に還るを夢に見つ

敵艦屠らん 我は征くなり

榊原吉一軍曹 仙台乗員養成所 20歳

第六三振武隊 6月7日出撃

父母宛の遺書の一節

九段にて再会望みます。

「サヨウナラ」「サヨウナラ」

靖国神社編

「いざさらば我はみくにの山桜」より

富沢幸光中尉 飛行予備学生出身 22歳

神風特別攻撃隊第一九金剛隊

20年1月5日出撃 ルソン島近海

父母宛の手紙の一節

お正月もきました。幸光は靖国で二十四歳を迎

えることにしました。靖国神社の餅は大きいですか

らね。

安則盛三中尉 飛行予備学生出身 21歳

神風特別攻撃隊第七昭和隊 20年5月11日出撃

本文の説明より

安則中尉は四男、そして五人兄弟の中ただ一人の戦死者となった。すべてを見通していたかのような安則中尉の辞世は

はらからの五人そろって旗のもと

一足先に 四男坊征く

「五月十一日の命日には靖国神社に参拝してやってくれ」という父の遺言を守り、三男の三作さんは命日祭である永代神楽祭に毎年参列している。

「特攻隊遺詠集」より

特攻隊戦没者慰霊協会発行の本で、特攻隊員が出撃にあたり心情を吐露した詩歌約八百点を、解説を付して記述したもの。

高石邦雄大尉 陸士54期 24歳

航空特攻石陽隊長 19年12月5日出撃

比島方面

大君の醜の御楯となりし身は

靖国社頭の花と咲かなむ

天野三郎少尉 陸士57期 22歳 航空特攻一字隊

12月5日出撃 比島方面

(妹天野和子の歌)

靖国の社に向いて合掌す

レイテの島に散りし兄見ゆ

福山正通中尉 海兵72期 23歳

神風特攻隊金剛隊 20年1月5日出撃

比島方面

たらちねのちは迎えん靖国に

明日はゆくくなり南溟の空

磯部 豊中尉 飛行予備学生 22歳

神風特攻隊金剛隊 20年1月5日出撃

比島方面

我も又還らぬ友の跡追いて

靖国の宮の若桜と散る

島村中一飛曹 乙飛15期 20歳

第1神雷桜花隊 20年3月21日出撃 沖縄方面

大君の辺にこそ散らん櫻花

今度咲く日は九段の社

粕谷義蔵少尉 乙飛4期 27歳

第1神雷隊 20年3月21日出撃

覚悟して大海原に羽撃の

響きは永久に靖国の社

棚橋芳雄二飛曹 丙特飛14期 22歳

桜花隊 20年3月21日出撃

若鷺は南の空に飛び立ちて

還るねぐらは靖国の森

長谷川実大尉 陸士55期 24歳

第20振武隊 20年4月2日出撃 沖縄方面

春まだき九段の花と咲き散りて

勝ちみ戦の基開かん

浅川又之少尉 幹候9期 23歳

第43振武隊長 20年4月6日出撃 沖縄方面

桜花と散り九段に還るを夢に見つ

敵艦屠らん我は征くなり

清水 定伍長 少飛12期 21歳

第44振武隊 20年4月7日知覧出撃 沖縄方面

いざ征かん弾も敵機も何かせん

今日は九段の花と咲く身は

大畠 寛伍長 仙台乗員養成所 14期 19歳

第74振武隊 20年4月7日万世出撃 沖縄方面

さくらさくら若桜今日は散りしも

明日は九段の花と咲く

梅村要三伍長 印旛乗員養成所 19歳

75振武隊 20年4月16日万世出撃 沖縄方面

錦着て白木の箱で九段坂

いざ吾征かん特攻隊

田熊克省少尉 海軍飛行予備学生13期 27歳

菊水部隊天桜隊 20年4月16日串良出撃

沖縄方面

大君の御楯となりて吾は今

翼休めん 靖国の森

服部武雄伍長 少飛14期 19歳

第105振武隊 20年5月25日知覧出撃 沖縄方面

国の為生命捧げし若桜

弥生の空は 九段坂上

巽 精造少尉 幹候9期 24歳

第64振武隊 20年6月11日万世出撃 沖縄方面

俺の住家は九段と決めたよ

しばし浮き世は仮のやどよ

久司博敏曹長 海上挺進第26戦隊 20年5月13日

沖縄地上戦闘

若桜国の鎮めと散りしとも

永久に咲きませ 靖国乃花

若杉正喜伍長 少飛14期 20歳

第60振武隊 20年5月4日都城東出撃 沖縄方面

靖国の桜となりて薫る日の

誇を胸に 秘めて飛立つ

座間重信中尉 陸士56期 23歳

神翔攻撃隊 20年4月11日 ニコパル諸島

大君の為にぞ散れと教ふらん

靖国社頭の 若き桜は

古野繁実中尉 海兵67期 24歳

真珠湾攻撃特殊潜航艇々長16年12月8日

ハワイ

靖国で会う嬉しさを今朝の空

(父に送った句)

磯貝 巖中尉 海軍飛行予備学生 24歳

第5神剣隊 20年5月4日鹿屋出撃 沖縄方面

靖国の花と咲かなむわれもまた

いくさの庭に散りし友らと

山本正記伍長 特幹1期 20歳

海上挺進第17戦隊 20年2月10日 マララ湾

靖国の社にしづまる武士の

み霊に続く 若桜かな

原 敏郎中尉 予備学生3期 28歳

回天金剛隊伊47潜 20年1月12日

ニューギニアホーランジャ

靖国の桜と咲かんとこしえに

南の海に果つるこの身も

中内静雄二飛曹 乙特飛1期 18歳

第8神雷攻撃隊 20年5月11日鹿屋出撃

沖縄方面

身はたとへ南の海に朽ちぬとも

やがて九段の花と咲くらむ

宗像幹夫伍長 特幹1期 20歳

海上挺進第6戦隊 20年2月13日

比島リサール州

征けば帰らぬあづさ弓

靖国の社 我を待つらん

加賀谷 武大尉 海兵71期 24歳

回天金剛隊伊36潜 20年1月12日

ウルシー泊地

驕敵を三途の川迄吹き飛ばし

身は九段の花と咲かなむ

近藤 豊伍長 少飛15期 18歳

第111武隊 20年6月3日 知覧出撃 沖縄方面

轟沈の空は青空靖国に

笑顔で迎へる 母の面影

引田耕一少尉 幹候10期 23歳

海上挺進第2戦隊 20年3月28日 沖縄慶良間

国の為嵐に向う山桜

咲くは何処ぞ 靖国の社

このようにその他の書物からも引用すれば、靖国

神社に係わるものは数限りなくあろう。

高村統一郎少尉 特操1期 27歳

第112振武隊 20年6月3日知覧出撃 沖縄方面

我がつとめ果して逢はん九段坂

桜の庭で 姉の待つらむ

木村 実少尉 幹候10期 23歳

海上挺進第10戦隊 20年7月19日 ルソン島地

上戦闘

憂国丈夫大義 九段社頭謝久闊

原町飛行場慰霊祭

10月6日11時40分より

原町市陣ヶ崎墓地公園

原町飛行場関係戦没者慰霊顕彰会

この慰霊祭は原町飛行場関係戦没者三三三柱及び大東亜戦争に於ける原町出身戦没者四六五柱を対象に毎年行われている。

慰霊碑建立から携わった地元在住の八牧通泰氏(陸士58期)夫妻を中心に、この地域在住の同期生の尽力で、盛大厳粛に行われた。原町市長、市会議長をはじめ地元有力者、地元出身戦没者遺族も大勢列席し、飛行部隊関係では、遺族・戦友が遠くは九州四国あたりから駆けつけ、参列者は二〇〇名に及んだ。



主碑

主碑のもとになった写真



女子奉仕隊の見送りを受け銚田を出発する鉄心隊



碑の前に設けられた祭段



地元出身英霊



飛行場関係戦没者

原ノ町飛行場に縁深き戦没特攻隊員に接ぐ
翠巒巡る原ノ町の郷 嘗てこの地に救
国の士集いぬ 東亜の大戦日に非なる
とき 身を以て国難を打開せんと 蹶
起せしをのこ 心を鍛え 業を練り
正気迸しりぬ 同胞います大八洲 祖
霊ましますこの山河 守護する者我を
措きてなし 狂瀾を既倒に廻らすは
必殺の戦法と鉄心極めて固し
夕陽に映ゆる国見山 帰るとも鴉
幼き思い 過ぎりしことあらん 特攻
の烈士も人の子 などかたらちねを思
はざらん それにも勝る国を思う心
我が肺腑を穿つ
帰らぬ出撃に 欣然として征きしは
後に続く者あるを信ずればならん 国
破れ半世紀 人の心これと乖離するこ
と 何んぞ甚だしき
かくばかり醜き国となりたれば
逝きにし人のただに惜しまる
ある遺族は詠いしと聞く
激動の昭和史に歩をしるし 平成に旬
余年を経たる我等老兵 猶心中一片の
耿心あれば 嘗て神々と共に抱きし志
失うことなきを期しあり 慰霊とて低
頭するのみにて何かあらん 我等残年
僅かなり 照闇の火となりて 特攻隊
員の精神を世に顕彰せん 乞う 櫛せ
給え

特攻隊慰霊協会 田中賢一

原ノ町飛行場関係戦没者 慰霊碑に因んで

この慰霊碑は特攻隊員だけを対象としたものではないが、主碑は鉦田教導飛行師団で編成した鉄心隊が、出発する時の松井隊長をモデルにした等身大の像であることが、訪れる人に深い印象を与える。

ここに記ってある特攻隊は鉄心隊だけではないが、代表と違って鉄心隊について少し触れてみたい。編成では一二名であったが、川合郁夫少尉が出発前日着陸時事故で殉職し、一名となった。

19年11月8日鉦田出発、マニラに進出し、12月5日松井中尉以下三機がスルアン島付近の敵艦に突入、ついで16日には志村少尉以下二機がミンドロ島付近に、18日には長尾曹長の一機が、29日には三木少尉以下三機がそれぞれ同じ海域の敵に、最後は年が明けて1月6日に岩広少尉以下二機がルソン島西方洋上の敵に突入し全員散華した。

松井浩中尉の遺詠

蛍飛び蟬なく島の秋の暮

島渡る鳥八絃の空かける

生甲斐は南の海に咲く桜

海山の親の御恩を大君に
捧げつくして天翔け征かん

西山敬次少尉の遺詠

惜しからぬ身は浮雲に比すれども
任は重し富士がねに似て

我が征くは霞む彼方の空の果て
などか惜しまん雲と消ゆとも

いざ行かんいざ諸共に励みなん
尽す心は永遠に変わらじ

長浜清伍長

乗員養成所時代の日記があるが紙面の都合で省略。

志村政夫少尉の遺詠

世のはてのどこどこ迄も天照らす国
仇なす敵は亡ぼさで止まじ

身は例え雲染む屍亡ぶとも
仕へまつらんすめらみいくさ

色も香もそふこと無かりし仇花の
今日に散るともなど惜しからむ

昭和十九年十月二十六日

隊付整備員の手記

諏訪 茂

新田原を出発して無事那覇飛行場着九州から初めて何時間も青い海原を飛行してみて、海上でエンジントラブル

があったら最後だと思いました。着いてから志村少尉が「諏訪、海上を飛んで何を感じたか」と質問された。「ハイ、故障のないように祈ってました。今日から一そう注意して、完全な整備をします」と答えたものです。

(一部略)

那覇飛行場を飛び立って20分位飛んで、志村少尉が油圧計の作動していな

い事を発見され、計器を指しながら伝声管で「石垣島に不時着するから飛行場を探せ」と命令された。石垣島の飛行場は小さいですから注意してみつけないとわからない位でした。降りてオイルエレメントを点検してみますと異物が入っており、オイルの流れを止めていました。

(一部略)

志村少尉は身なりも清潔にしておられ、きちんとした性格の方でしたから整備にも完全を求めておられました。

内地から大きなトランクを持参して来て「これには俺の青春がつまっているんだ、これも俺と一緒に散るんだ」と言っていました。

いよいよ特攻出撃の時もトランクを積んでいかれました。「軍刀も俺の魂だ」と言って持っていきました。

12月16日夕刻、いよいよ志村少尉と藤村少尉の二機が出ました。志村少尉

翌日の現地の新聞に志村少尉機敵輸送船撃沈と報じた。

私は思わず、やったなと叫んだ。しかし次の瞬間、あの温顔な志村少尉は逝ったと悟るほかありませんでした。続いて18日には長尾曹長、19日には星少尉、29日に三木少尉と林曹長が出撃しました。私は林曹長に「お世話になりました、御成功を祈ります」と声をかけた。

林曹長は後に残る隊員に「おい先に行くぞ」これが残る小川曹長と岩広少尉に言われた最後の言葉だった。

年が明けて20年の1月6日、最後に岩広少尉と小川曹長が出ました。めざすはリンガエン湾でした

こうして鉄心隊十一名の方々には比島の海に散り、水漬く屍となりました。

根拠資料「原町戦没航空兵の記録」

「陸士五十七期戦没者記録」

追悼

慰霊顕彰に尽瘁せられしお2人

田中賢一 記

飯野伴七君

9月3日逝去せらる。会報の編集について海軍航空のことはこの人にお任せであったのに、痛恨の極みである。葬儀には参列できなかつたので次の弔電を送った。

『残暑なほ消えやらぬ9月3日昼下がり 君が訃音に接しぬ 先般沖繩巡拝に行を共にせしを懐ひ 驚愕只ならず 転た人生の定め無きを思ふ 君の辱知を得たるは 特攻協会の会報編集担当となりし時以降にして既に旬年を経ぬ 君海軍航空歴戦の勇者にして 亡き戦友就中特攻戦』

松本武仁君

3月31日逝去せらる。松本君が病臥中とは全く知らず、訃報をうけた時は本当に吃驚した。この人とは永い付合いで、特攻に限らず軍関係の絵は随分画いてもらった。私は体調不良で葬儀に参列出来ず、左記の弔辞をほかの人に捧げてもらった。

『麦風颯々たる好季節なるに 晴天の霹靂の如き君が訃音に接す 先日電話せるに通せず 病臥中とは知らざりき 君に辱知を得たるは二十年も前なりしか 君彩管に秀で戦場の各場面を画く 体験せざることなれど本より報国の念深ければ 悉く肯綮に』

没者に対する畏敬の念 人後に落ちず心情溢るる玉章を投稿せらるること屢々なりき

各種慰霊行事に卒先参加せられ 沖繩巡拝の折り 空華の塔を参拝する 君が真摯なる横顔 洋上慰霊の際海行かばを高唱する思ひ溢るる容貌 今なほ眼前に彷彿たり 特攻隊員の精神 日本民族より消え去りし現今 君を失いしは国家的損失大なりと言ふべし 然れども 乞う安んぜられよ 我等生ある限り特攻烈士の顕彰に努め 君が遺志に副はんとす 懺せ給え』

当たる 英霊の真姿顕彰の大作を画き 靖国神社参道に展示すること屢々にして 敬服に堪えざりき 君に依頼せし空挺部隊の絵十七点は自衛隊空挺団資料館及び川南護国神社に展示ありて 我が部隊の活躍の姿を後世に伝うる絶好の資となれり

今後も特攻隊関係にて君に依頼することありしに 俄に訃に遭い痛恨限りなし 君古希を過ぎたれど尚春秋あるべきに 何んぞ急ぎしか 惜しみても余りあり 黄泉に向かう君が後姿に向かい祈柳の辞を贈る 君振向き給え』 戦の跡を偲びて筆執りし 君が心ぞとうとかりけれ



空華の塔献花



海行かばを歌う



少飛会海法画



靖国神社参道に展示終ってホツとしたところ



世田谷特攻観音年次法要の際は観音寺本堂の手摺りに展示した。特攻観音の堂宇はこの左にある。

松本武仁君は英靈活躍の絵を画き続け、それをことある毎に靖国神社の参道に掲げ顕彰に務めた。春秋の大祭時は勿論、それ以外にも参拝者が多いときには必ず展示した。月平均四回はあったろうか。戦友連の会員が手伝ったが、その労力だけでもたいへんなものだった。

また年一回だが世田谷特攻観音の年次法要の際も、奥様の協力で毎回展示した。千葉や水戸の護国神社に展示したこともあった。伊藤直之、市川国雄両氏の絵も含まれていたが大部分は松本君のものだった。



宮崎県児湯郡川南村にある唐瀬原降下場における落下傘部隊の訓練。以下3点の絵は川南護国神社に奉納した17点の挺進部隊の絵のうち。因みにこの護国神社には挺進部隊の全戦死者が祀られている。



昭和17年7月22日宇都宮飛行場で、内地に帰還した第1挺進団の天覧演習が行われた。



パレンバン空挺作戦は昭和17年2月14日行なわれた。精油所の南側に降下した挺進第2聯隊第1中隊は、その日のうちに大きい方の精油所を無傷で占領した。



昭和20年5月24日義烈空挺隊は熊本の健軍飛行場を発って沖縄に向かった。機上で別れを告げる奥山隊長（右）と諏訪部飛行隊長。

この二点の絵には本人の書いた一文が添えてあるので、そのまま掲載する。



若き特攻隊員

故郷の両親や姉妹兄弟を敵襲から護る為に、たくさんの10代の若者が特攻隊員となって出撃しました。そして、死を前にした隊員達の目が生き生きと輝いているのは、自分達の死の意味を「後ニ続クヲ信ズ」、つまり戦後の日本が平和で豊かになる為ならという、強い使命感と責任感を抱いていたからです。

絵・戦死者追悼画家 松本武仁 文・神崎美恵子

阿修羅

特攻戦域に入ると、敵の対空砲火は熾烈をきわめ、操縦者の眼前は簾のような火線に包まれる。敵艦に体当たりすると言う任務を遂行する為には、この火線を突破しなければならぬ。操縦者はこの壁が如何に大きくとも、例え意識が朦朧となっても、操縦桿を手放さなかつた。まさに特攻隊は阿修羅となって突っ込んで行ったのである。狂気のような精神状態では到底なし得ない行為であった。

絵・文 戦死者追悼画家 松本武仁





筑波山上空

特攻隊員の終戦 空挺隊員の部

田中 賢一 編

国破山河在

滑空飛行第一戦隊 特攻隊

陸軍少尉 石津 昌夫

出撃を目前にして終戦を迎えた空挺特攻は二組ある。その一つは沖繩に向かう滑空特攻であり、もう一つは海軍の剣作戦に参加した園田隊である。

一、滑空特攻

この作戦の一部始終は会報46号に「終戦で未発に終わった特攻作戦」という題で出しておいたので、それを御覧頂きたい。ここでは滑空飛行第一戦隊の搭乗者で、この特攻作戦に参加することになっていった者五人の投稿文を得たので紹介する。

私は、特攻隊の志願書に「熱烈望」と書いた。全員の志願書が集められた後、中隊長に呼び出されて「お前は長男だから駄目だ」といわれたが、何度も粘って八名の特攻隊員の一人として選ばれた。

我が国航空戦史に残るであろうこの滑空特攻の一番槍を目指したのは愛国心であったのか、熱烈望であろうと希望であろうと何れは順番が廻ってくるのなら、熱烈望の方がいさぎよいとの功名心であったのかは今となっては定かではない。

終戦の「ご詔勅」を聞いたのは、福生飛行場（現横田基地）から程遠からぬ事務所の様子であった。

沖繩特攻を真近かにして、敵飛行場に滑空機で強行着陸をして、敵機爆砕のために走り廻る四輪駆動車の操縦訓練や二十ミリ機関砲の射撃訓練をしていた。

機関砲の扱いにも習熟し夢中になって標的に向って射撃していたところ、突然砲声が鳴り止んだ。はて故障かと砲を見ると何んと砲身の先端が二十糎ほど真っ赤になって垂れ下がっている

ではないか。それは飛行機に搭載して高々度で射撃する云わば空冷の機関砲を無謀にも炎暑の地上で連続発射したのが原因であった。

この報告を受けた部隊幹部は愕然とした。予定していた沖繩の敵飛行場では全く役に立たないということだからである。それでも、特攻を目前にして早急に代替の砲を武器庫に受領に行つたその帰り道でかの「ご詔勅」を聞いたのである。

放送を聞いても音声が不明瞭でなんの事か良く解らずにいると、誰からともなく戦争は終わつたらしいとのひそひそ話で、聞く者皆が半信半疑であった。飛行場に戻っても部隊幹部からは何の話もなく、ただそのまゝ、待機した。

それより二・三日前戦友が広島に「桜弾」が投下され、壊滅的打撃を受けたらしいとの話が広まっていた。これが後の原子爆弾であった。夕食になり、今朝まで特攻隊員は神様扱いの特別待遇をうけていたのだが、突然、米の飯と梅干しだけに格下げされ、此処に至って事態の急変と特攻隊員でなくなった事を実感した。

翌朝は朝礼もなく無為に過ごしているうちに、厚木の航空隊では終戦を納得しない特攻隊員が特攻攻撃に出撃していった等の情報が入乱れ、こと此処

にいたって敗戦の事実を確認したのである。

中学生のころからグライダーに乗り、末は大空で祖国のためにと誓ってきた私にとって将来の目標を突然失って、羅針盤の夜間飛行で迷走している様な気がした。

炎天下の飛行場は静まりかえり、周辺の夏草が喘いでいるのが目に映った。此処で柄にもなく、杜甫の春望「国破れて山河あり 城春にして草木深し」の詩の一節を思い出した。杜甫の心境とは異なっても、まさか自分がその現実の身となろうとは夢にも考えていなかった事である。

途切れ途切れに伝わって来る不利な戦況に何れは今日のような日も訪れるかとも思っていた私にとって、**「祖国の為に自分の為すべき任務は全て終った」との空虚な心境であった。**

顧みれば、この心境は淡々としていたというような立派なものではなく、飛行将校とはいっても若冠二十才位ではこの程度の考えしかなかったのであるろうと思っている。

あの時「熱烈望」と書いた情熱は、私のその後の人生に、即断、即決、即行動を信条とさせて今日まで影響を与えている。

憶い出すままに

岩佐 陽太郎
少尉 特操出身

記憶も大分薄れて参りましたが当時
のことは鮮烈に憶い出されます。私は
沖繩中飛行場攻撃を命ぜられました。
二機編隊で攻撃隊長は挺二聯隊の将月
中尉で、私は一番機で、正操今西曹長、
副操岩佐、二番機は正操竹中軍曹、副
操阿部少尉、射手曹長各一名の編成で
した。

滑空飛行戦隊に配属された特操一期
九九名は全員学生航空連盟出身で、訓
練所(八ヶ所)に入所に際しては、事
故に依る死者に際しては一切の異議を
申し立てざること、卒業に際しては必
ず陸海軍操縦将校を志願すること等、
本人並に親権者の同意書を提出させら
れました。この時、既に私共は近い将
来死に直面する覚悟は出来ておりまし
た。

二十年八月十五日正午玉音放送を福
生の戦闘指揮所前で聞いたが、電波事
情が悪かったので殆んど聞き取れず、
僅か堪え難きを堪え忍び難きを忍びの
御言葉しか聞きとれず、私は愈々ソ連
への宣戦布告かと、大変な事態になっ
たとの思いで中隊へ帰りました。中隊
では佐藤中隊長、広田大尉、将月中尉

等の幹部が、ポツダム宣言を政府が受
諾したようだと等々沈んだ顔で話し合っ
ていました。私は入隊以来世論に惑わ
されず政治に拘らざるの御諭の如く、ラ

ジオの報道以外全く存知せず、敗戦は
あり得ず本土決戦による劣勢を挽回す
るか、一億玉砕の何れかであるとのこ
とを信じ、それに殉ずるは当然との境
地であったと記憶しております。

停戦、武装解除、復員と矢継ぎ早に
起こる事態に唯々呆然自失、黙々と命
ぜられた事を実行、八月二十三日古林
戦隊長の声涙溢れる解散の辞で福生を
後にした次第です。

“蝗のたわごと”

滑空飛行第一戦隊付
陸軍少尉 阿部 謙

その時、昭和二十年八月十五日正午
私は東京西郊奥多摩の山中にある陸
軍立川航空廠疎開倉庫事務所にいた。
時あたかも、玉音放送を拝聴するため
全従業員が集合を命ぜられ各持場から
三三五五事務室に集まって来ている頃
あいでもあった。

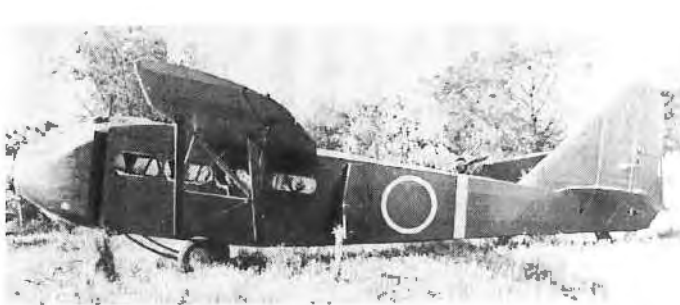
前前日の事、二十ミリ機関砲の試射
を試してみたところ一連射もしないうち
に情けなや砲身が折れてしまったので
ある。機関砲を地上で冷却装置なしで
連射すれば折れるのが当然わかってい
るのにと、普通の精神状態なれば怒り
心頭に発し、何処かに怒鳴り込んでい
たところであったが、考えてみるとこ
の頃の私はなぜか全たく冷静そのもの
で、唯黙々と代品入手のため関係先を
走り回り落着いた所がこの奥多摩の倉
庫であったわけである。

さして広くないその事務所は従業員
でぎっしり埋まり、所長の机の上に置
かれた古ぼけたラジオの前に引き入れ
られ、玉音放送を最初から終りまでし
かこの耳にする事が出来たのは誠に
幸いであった。このときの玉音放送は
録音が悪く雑音が入りばなしのうえ、

陛下独特の抑揚のある語り口の為もあつ
てか、聴くものの多くが話の内容の意
味が掴めず唯々有り難がって解散して
いったものであった。然し私は前述の

ごとく、一番聞き易い場所でありと
聞いて居たせいも、放送の言わんとす
る意味即ち“ポツダム宣言の受諾・戦
争の終結”が理解出来たことから、所
長の准尉と話合の上今日の現物受領
を一時控え新たな命令を受けた上必要
あれば再訪することを約して福生の部
隊に返ることとした。

帰隊途中の車の中での私の頭の中は
唯々「戦さは敗けた」だけで運転する
鎌田少尉(挺進戦車隊出身)と互いに
見交わす顔も唯々口惜しさに張り裂け
んばかりの形相、一言も言葉もかわさ
ぬまま隊に帰入りついたのであった。
帰隊し将校室に入るとそこでは思いも
かけない人物が演説をぶっていた。其
の人物とは二月に秋水部隊に転属した
元一区隊長K中尉(大尉に進級してい
たかも知れないが)であった。黙って
聞いていると何だか話が可笑しい、即
ち「今承った有難い陛下の大御心を体
し我々一同、心をあらたにしこの難局
を打開すべく努力・邁進することをお
誓いしなければならぬ」と言った意
味を採り違えた概であった。そこで私
は彼のまえにゆき「ポツダム宣言の受



「ク」-8 II型

諾、即降伏、敗けたと言う事です」
と言った途端ピンタを二発食らった。

彼にしてみれば、この若僧なにを不
遜な事をいうかと思つたらしいが、時

たまたま管内拡声機がNHKの解説を
流したので、私はK大尉を窓際に

連ていって、誤解しているのはなにも
貴方一人だけではないのですから、良

くこの解説を聞いた上で対策をご相談
ください、と言つた所、彼もやっと我
れに返つた程で解説に耳を傾ける様
になり、その場の緊張した空気が一遍に
ここに来て和らいだ模様がした。

(一部略 編者)

最後に標題の我が愛する「蝗」に就
いて書いておかねばなるまい。

「蝗」とは昭和十八年十二月一日徴
兵猶予を停止された一般学生と同様に
一般の部隊に入営後、学生時代に大日
本飛行協会全国各訓練所にて飛行訓練
を受けていた者で、滑空戦隊に特別操
縦見習士官として再入隊させられた飛
行機野郎(百名)が自らに名付けた
「あだ名」である。「蝗」と呼称した
起因については二つの理由が考えられ
る。先ずその第一に挙げられるのが、
教育期間中の我々の集団行動にある、
恰も「蝗」の大軍の如く近隣の農家の
食い物を求めて歩き回つた我が仲間
達、これ程素直に全員の認知が得られ

た「あだ名」も珍しいのではないかと
感心している。

「空は飛べども蝗は蝗、所詮鳥にはな
れわれせぬ」

自力航行の出来ぬ滑空機乗りの哀歎
を込めた自嘲的な自己表現も根底にあ
る事を理解して戴きたいものである。

ときは過ぎ戦後すでに五十七年、今
更ながら戦隊にいた二十ヶ月を省みて、
我々素人将校集団に理解と温情をもつ

て接していただけた戦隊長以下大勢の
戦隊員の方々に、心よりの御礼を申上
げ結びといたします。



「ク」—8

めぐり来る私の終戦の面影

少飛9期軍曹 機上通信

高橋 清

この日、早朝達しあり。「天皇の放
送がある」と。

「本日正午より天皇陛下の玉音放送
がある。各部隊は単独の軍装をして、
飛行場前の戦闘指揮所前に集合、整列
すべし」

天皇陛下の御声は未だ聞いたことが
ない。果たしてどんな御声であろうか。
どんなことが放送されるのだろうか。

「日本国民は全滅するまで国土を護
れ、と言うのだろうか」

「まさか降伏するという言葉ではな
かろう」

などの議論が仲間同士でしていた。
「いや、どうだかわからねえ、満州
で王手、日本本土で王手、沖縄で王手、
南方で王手、支那だって王手だ。まさ
に日本は手も足も出ない状態じゃない
か。負けだよ！」

早くも古参の曹長は負け組だった。
「勝つんだ」と言う者は一人もない。
何とか有利な条件で戦争は止めにした
い。誰しもがそんな気持ちであったに
相違ない。ただ口に出して言わないま
のであった。

吾々は単独の軍装で指揮所前に整列

した。空襲警報発令中である。拡声器
は何となく調子が悪い。敵の小型機は
立川、町田方面を飛び回っている。幸
いに吾々の上には来ない。

遙か南の方でボンボンと高射機閃砲
の音がした。小型機に命中してバラバ
ラに分解して落下するのが望見された。

正午三分くらい前になつたら敵機は
何処かへ去り、全然爆音は耳に入らな
くなった。

いよいよ正午である。「カツ カツ
カツ」。三秒前から信号が切れ、「コー
ン」と正午が知らされた。蒸し暑い。
炎暑の日だ。

「只今より重大放送を行ないます。
みなさまご起立願います」とアナウン
スされた。陛下がマイクロフォンの前
に立たせ給うことすら異例の中の異例
であった。

「君が代」が奏せられた。大詔は米
英支ソ四国共同宣言受諾を宣言せられ
たとのことである。玉音(天皇の御声)
曇らせ給う(涙声であった)。雑音が
入り、意味がハッキリと聞き取れなかつ
た。これが多くの人の率直な感じであつ
た。最後に再び君が代が奏せられ、解
散して居室に戻つてから「敗けたのだ」
ということが解つた。午後、飛行機に
取り付けてある無線機にスイッチを入
れアメリカの日本向け放送「アメリカ

の声」を聞いた。それまではデマ放送とばかり云っていた放送である。「日本帝国政府は四国共同宣言を受諾」と繰り返して繰り返して放送していた。吾々は特攻隊特別宿舎三井別荘をひき払って部隊兵舎に入った。

当時陸軍航空審査部として新鋭機を連日テスト飛行を行っていた飛行場も急に静かな基地となってしまった。爆音を上げて飛び立つ飛行機はもうない。将兵は心中男泣きに泣いた。しかし「あゝ助かった」と思ったのも本心である。吾が部隊は特攻作戦のため、福生に進出して一週間。上級司令部との連絡もとれず、戦隊長以下進退の去就に迷った。

この十五日夜から灯火管制も無くなった。いよいよ平和の時代に入ったのだと思った。

八月十六日、ラジオは国体の護持、大和民族消滅の防止云々と叫んでいた。昨夜審査部総務部長の隈部正美少将が家族全員で自決したと聞く。阿南陸軍大臣も自決したと聞く。その遺書に「二死以て大罪を謝す」とあったそうだ。

八月十六日の午後、公用で東京に出張した軍曹が一枚の紙片を見せた。途

中で拾ったという。

檄文

海軍厚木航空隊 海軍少佐 ○○○

起文

皇国民よ座して亡国を待つか、戦って名譽を守るか！

一、武力なくして天皇の大権なし

二、国家の独立なくして皇室の安泰なし

三、座して亡国を待つか必死以て名譽を守るか

四、原子爆弾恐るるに足らず

五、重臣は最も国家の悪逆分子なり

五、重臣は最も国家の悪逆分子なり早くより米英の手先になって謀略に乗った奴だ

五、重臣は最も国家の悪逆分子なり早くより米英の手先になって謀略に乗った奴だ

六、皇大神宮の神勅によらずして御前會議により勝手に決めた聖断は真のご聖断にあらず 重臣の悪智恵なり

七、国民よ必死以て戦うべし 血を以て得たる数々の權益を今は只涙で返すのか

先輩の勇士に何と申訳が立とう 我が帝国海軍航空隊は絶対に降伏せず

紙片は一巡したが吾が隊員の中から

八月二十二日 台風房総南部に上陸す

はこれに同調する意見を吐く者は居なかった。地獄の門まで連れて行かれた特攻隊員としては、再び死線に戻る気持ちにはなれない。まして天皇陛下より大命が下った以上軽率妄動は許されるものではない。

八月十七日に至り、福生飛行場にある各隊の飛行機は、格納庫前整備線に整列せしむるべしと命令が下った。先ず審査部の飛行機が遠い掩体壕の中から出てきた。そして一機、一機整備線に頭を揃えて並べられた。

「立つ鳥 あとを濁さず」と、私の部隊の九七式重爆撃機も兵舎とは飛行場を隔てて反対の、東北にあたる桑畑の中の掩体壕から引き出してきて並べた。

その翌日、プロペラは全ておろしてエンジンの前に置けと命令があった。身につけていたピストル、軍刀なども全部引き揚げられた。これらの数々の兵器は講堂のような建物の中に机が並べられ、そこにまるで兵器検査でもされるように並べられた。建物は全部鍵が掛けられて、出入りは出来ない。

武装解除、無条件降伏。この時ほど敗者のみじめさをいやというほど覚えさせられた。

この夜、飛行場整備線に並べられた「クハ」グライダーは、台風にもまれ引っくり返ったり、横転したりしてぶざまな姿となった。

八月二十三日の朝は台風一過とはいえ、あまりすっきりとした天気ではなかった。

八月二十五日朝早く米グラマン・コルセア艦載機が福生に飛んで来た。飛行場滑走路に着陸し、そのまま地上滑走、すぐにエンジンをふかして飛び上がった。その反復が幾度か続き、次の日も次の日も毎日飛来するようになった。飛行場の偵察飛行なのであろう。

吾々は飛行場の隅に立ち、米軍機の白い星のマークを眺めたとき、再び敗戦の惨めさが身にしみた。

特攻隊は解散式を行ない、遠い所の出身者から復員業務に入った。

部隊長から最後の訓示として「民族のある限り必ず日本は復興すると確信する。諸君は激情に誤らず、新日本日本の担い手として行かれんことを望む」

と申された。復員の食料としては「焼き米」と航空糧食などが渡された。私は最後まで残ることになった。

八月三十日、マッカーサー元帥は初

めて日本に上陸した。愛機「バター」号に乗って、比島マニラから沖繩を経て厚木飛行場に飛来した。

これで大和魂もアメリカ・ヤンキー魂に完全に敗北したのであった。この文章は昭和二十年七月・八月の二ヵ月間の私の体験である。

それは少年志願兵として陸軍学校に入り、六か年務めた軍隊生活の最後の場面である。

敗戦、終戦といっても意味は同じだが、吾が陸軍の最後は、私の知る範囲では案外穏やかに幕を閉じた。あっけなく「敗けました」と武器を揃えて明け渡した。

ついに神風は吹かなかつた。建国以来わが国は外国より国威を傷つけられたことはないと教えられてきたが、これは一片の空文に過ぎなかつた。

八月十六日大命に基づき、航空総軍は戦闘を停止し、戦争は終わった。

私はあの日から五十年過ぎた今も、アジア各地、日本全国の都市の空の戦い、日本空軍絶望の境地を忘れることは出来ない。

あの時代を見て来た者でなければ、理解することは出来なからう。

あの時のこと

一ツ石 晋

機上機関 軍曹

「滑空戦隊の解散も迫った。日本民族のある限り、必ず復興する、諸君は激情に誤らず新生日本の担手にならんことを望む」。との古林忠一中佐の訓辞であった。

広い飛行場の一角に立つ私は、はるか彼方をいつまでもみている虚脱の私であった。

隣接の厚木海軍基地の小型機が飛来し、ワラ半紙四ツ切りに書いた激文をまく。

「座して死を待つか……」。語り、死しても立とうとの内容文であった。

私達も同心境であったが、戦隊は動かなかつた。

十九年に入るや、戦況も悪化、南方戦線へ各々単機で空輸作戦に参加した。前進の新田原では駐機も飛行場周辺なので宿舎の航空寮よりは徒歩での横断である。

正午宿舎に向かう私の目に、翼下に真昼の日光を避け、私物を入れた落下傘囊の横に軍刀、寮の乙女達が造った弁当、これが最後の食事だろう、薄暮には飛立つ士官(学徒)隊員である。

横を通る私も無言であった。

筑波飛行場は、空挺訓練には障害物

のない関東平野の一角であったが、帝都や隣接日立工場群の空襲と、訓練もままならず、五月に入るや、戦隊は北鮮宣徳に移駐した。

同飛行場周辺で、地上に低空よりの急降下の訓練するのを望見するが、これも特攻訓練だろう。しかしこの訓練も現実となった。格納庫前に整列した

隊員に訓辞をしている隊長、日の丸の鉢巻、飛行服の腕に日の丸をつけた、まだ童顔残る隊員、本土基地に前進するのだろう。国を思う中学生が志願してなったのだ。今この状況を親、兄弟

がみたらと、私の脳裡には今でも焼きついている。六月戦局は沖繩攻防の熾烈な戦いとなっていた。その頃私の機が命令受領の将校を乗せ筑波に飛んだ。宣徳帰隊の私達に、予想通りの特攻作戦が下達

された。各人には直ちに特攻志願書の呈出が命ぜられた。つまり希望・熱望・熱々のランクであった。私には、一ランクは書けなかつた。それから訓練も夜間だけで、「クー」に積載の小型四輪駆動車で着陸後の地上作戦だった。

この年は冷夏で、七月半ばからは毎日のキリ雨。前進基地宿生に飛ぶに悪

天で待機、「クー」の曳航は天気が左右する。

宣徳を飛立ったのは八月に入ってからだった。私達の離陸を手を振り見送る残留者も征く者も、後に続くを信じ共に悲しそうな気持ちだった。

福生は航空審査部で部隊の飛行場ではなかつた。東京に近くても空襲はなく。わが戦隊の前進基地にはもってこないところ。それに戦闘部隊でない。

私達の機には火器の装備はない。今度の作戦は制空権のないところ、日中は航空廠で重火器の整備。残りの機は薄暮より夜間の訓練だけとなった。

宿舎となったのは、多摩川近くに建つ某財閥の大きな別荘だった。食事も特攻食で、食糧不足の銃後を思い、その暖かさを感じ、感情は高まった。なお、寮には低学年の児童等が生活していたが、親元をはなれての毎日健康に思う。私達も会話から次第に笑いが消えていった。

二十年八月十五日の正午、格納庫前に整列した私達は、天皇陛下の重大放送を聞くが、日本の敗戦史を知らぬ私達は信じられなかつた。私の脳裡には同僚の死が浮ぶ。

筑波での新戦隊も、教官以外は、曳航・滑操者も未習のため、訓練では二〇余名の犠牲者を出した。年月は過ぎ

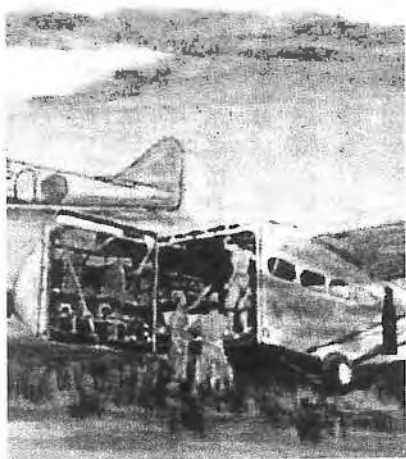
でも、この同僚を昨日のように忘れることがない。

私達の福生前進基地も、終戦前の十日間だけだった。戦後戦友の便りによると、米占領軍の横田空軍基地と様相が一変しているとのこと。遠地の私はまだ一度もみていない。

最後に書きたいことは、歴史の批判、殉国の士を戦争協力者とレッテルをはり、我国歴史と修身教育を取り上げた学校教育。生徒が先生に暴力、子供が親をバットで殴る。戦後の自由主義のツケで、幼児より人間性を忘れ知に走った戦後教育の誤りである。

新生日本の民主、自由主義を体得して、後世に悔いを残さぬためにも。

ク-8滑空機で資材を空輸の為積み込んで
いるところ



二、天雷特別攻撃隊

戦争末期海軍総隊は一式陸攻に陸戦隊を乗せサイパンに強行着陸し、敵基地に鉄槌を加える特攻作戦を計画して、作戦名を剣作戦と呼んだ。塔乗部隊は呉鎮第一〇一特別陸戦隊だったがもう一個隊作ることになり、陸軍に兵力差出しを求めた。そこで陸軍は挺進第一聯隊にその部隊の差出しを命じ、聯隊では園田大尉指揮の二個中隊を出した。園田直大尉は戦後代議士になり外務大臣や厚生大臣を務めた人である。

園田氏は昭和五十九年死去したが、生前私に語ったことを主体にして追悼録を作ったので、該当部分を引用する。

(若干主題と離れるが、この作戦の内容を紹介する意味で少し前の方から引用する。)

三沢一十歳、そして終戦

八月初めに三沢に全員勢揃いした。海軍総隊司令長官小沢治三郎中将は「全員特攻の秋が来た。陸海軍心を一にし、大痛撃をサイパンに加えようではないか」と訓示し、天雷特別攻撃隊と命令した。

海軍選り抜きの搭乗員をもって編成した一式陸攻三〇機の飛行隊と園田隊をもって、第二剣作戦部隊を作ることになった。

海軍総隊では、七月下旬に作戦を実施する予定で準備を進めた。ところが七月十四日、三沢基地は米機動部隊の空襲を受け、同基地にあった剣作戦部隊の陸攻が潰滅的打撃を受けてしまった。豊田軍令部総長は二十五日、剣作戦の延期のやむなきに至ったことを、次のように奏上しなければならなかった。

剣作戦ハ今次月明期ニ実施ノ予定ナリシ処七月十四日ノ敵機動部隊ノ三沢方面空襲ニ依リ陸攻一八機ノ被害アリ百方手段尽セシモ天候不良及其ノ後敵機動部隊ノ策動ニ依リ機材ノ準備間ニ合ハザリシヲ以テ 準備訓練ヲ完全ニシ本作戦ノ必成ヲ期スル為 次期月明期間八月十八日以降ニ延期ノ已ムナキニ至レリ



1式陸攻

八月に実施予定の剣作戦には第二剣作戦部隊も参加することになった。剣作戦部隊の攻撃基地に対する指向兵力は次のようなものであった。

第一剣作戦部隊 グアム 二〇機

 テニヤン 一〇機

第二剣作戦部隊 サイパン 二〇機

 テニヤン 一〇機

さて、第二剣作戦部隊は三沢で計画を練り、千歳に行き訓練を行うことになり、部隊は鉄道で、隊長以下数名は飛行機で千歳に向かった。八月六日千歳東飛行場に集結完了した。元々陸海軍一体の団結を固めることが第一である。千歳の海軍部隊は園田隊の入る三



園田大尉

角兵舎の入口に鳥居を建て、園田神社と大書してあった。鳥居は靖国神社に行つてからでよいのにと苦笑したが、悪い気持はしなかった。ここで陸海軍が起居寢食を共にし、救国の人柱となるよき士縁に結ばれたことを感謝しつつ、ひたすら訓練に打ち込んだ。

八月十五日、重大放送ありと聞き、マリアナ攻撃に対し大元帥陛下親しく激励を賜ると、ラジオの前に全員整列して固唾を飲んだ。玉音は聞き取り難かったが、共同宣言受諾ということの意味も判らず、園田隊長は「戦を一時的ストップせよ」との仰せで、そのうち再行が発令されるであろうと説明し、自らもそう信じた。暫くして正式に停戦が命ぜられ部隊は騒然とした。

血気に逸る将校の間に次の二案が議論された。その一つは、予定通り発進基地厚木に前進し、天下の形勢をみることに。この頃厚木の海軍航空隊から徹底抗戦の呼びかけがあり、厚木に行けば局面打開の方途が見出せるかも知れないと思つた。もう一つは、北海道と本州は遮断され、北海道は別の国になるかも知れぬ。そのときは北海道に残り、この広大な天地で民族自立のため一働きしよう、という考えであつた。

園田隊長は前者の案を採つた。十七

日、全飛行機に出動を命じ、乗れるだけの部隊を載せ、元々松島飛行場まで飛んだ。厚木の状況がよく判らないので、松島で形勢を見ようとした。

松島に着き、陸海軍人に賜つた終戦の勅語を拝し、承諾必謹に決した。マリアナに突入しようとしたこの飛行機をむざむざ敵に渡すことは忍びずと君が代のラッパを吹奏しつつ火を放つた。搭乗員も空挺隊員も紅蓮の焰を眺めて慟哭した。総てが終つたのだ。身体の隅々にまで浸み込んでいた忠誠心が、行き場を失い、悶え苦しむ、やがて凍結し、茫然自失、身体は一切の動きまで止め、空しく焰を見詰めた。

その晩は瑞蔵寺に泊つた。松島の景勝と大伽藍に接すると、国破れて山河あり、日本の国にこの山河と伝統が存する限り、まだまだ亡びることはあるまいと一縷の光明を見出すことが出来た。

夜通し語り合つた。後に続く者を信じて往つた戦友のことを考えると、断腸の思いであるが、阿南陸相の遺書に「神州の不滅を信じ」とあつたことが伝えられ、神州不滅のためにこそ、我が国が国家再建に挺進しなければならぬ。園田隊長は自己の決心の遷り変りをも、そのまま部下に語つた。話しているうちにまた新たな決意と感激が湧き出て、

やがて短い夏の夜は明けた。園田が厚木に前進すべきか否か迷つたとき、心の拠りどころとなつた勅語をここに掲げ、同じ思いに当面した我々の、往時を偲ぶよすがとした。

大東亞戦争終戦二際シ
陸海軍人ニ賜ハリタル勅語

昭和二十年八月十七日

朕曩ニ米英ニ戦ヲ宣シテヨリ三年有八ケ月ヲ閱ス 此間朕カ親愛ナル陸海軍人ハ瘡痍不毛ノ野ニ或ハ炎熱狂濤ノ海ニ身命ヲ挺シテ勇戦奮闘セリ朕探ク之ヲ嘉ス

今ヤ新ニ蘇國ノ參戰ヲ見ルニ至リ内外諸般ノ狀勢上今後ニ於ケル戰爭ノ繼續ハ徒ニ禍害ヲ累加シ遂ニ帝國存立ノ根基ヲ失フノ虞ナキニシモアラサルヲ察シ帝國陸海軍ノ闘魂尚烈々タルモノアルニ拘ラス光榮アル我國體護持ノ爲朕ハ爰ニ米英蘇並ニ重慶ト和ヲ媾セントス若シ夫レ餘鏑ニ斃レ疫癘ニ死シタル幾多忠勇ナル將兵ニ對シテハ衷心ヨリ之ヲ悼ムト共ニ汝等軍人ノ誠忠遺烈ハ萬古國民ノ精髓タルヲ信ス
汝等軍人克ク朕カ意ヲ體シ鞏固ナル團結ヲ堅持シ出處進止ヲ嚴明ニシ千辛萬苦ニ克チ忍ヒ難キヲ忍ヒテ國家永年ノ礎ヲ遣サムコトヲ期セヨ

あの頃私共が辿つた道

渡辺 源一
第二中隊小隊長
中尉少候23

天雷特攻隊編成

隊長 大尉園田直
第一中隊(一五〇名) 長大尉山本章
第二中隊(一五五名) 長大尉大屋稔

筆者第二中隊小隊長 中尉

私は七月二十八日より一週間休暇を貰い、結婚の為郷里の山梨県に帰省中で、八月四日妻を伴つて横芝に着いたら、中隊は既に北海道千歳に向かい出發した後だった。私は兵衛受領の為残っていた島田准尉以下を指揮し鉄道で千歳に向かい、八月十三日夜先ず三沢の海軍航空基地に到着した。

八月十五日正午に重大放送があると、この日集合を命ぜられた。そこで停戦と知り、一式陸攻に便乗して千歳に行つた。

千歳基地は情報不足により流言飛語が渦巻き、ソ軍の北海道侵攻の噂が交錯し、陸海軍とも動揺していた。園田隊長は先ず松島まで前進する決心をし我々全員は一式陸攻に搭乗し松島海軍基地に到着した。そこで陸海軍人に賜つた終戦の勅語を拝承し、承諾必謹に決した。ここで海軍と別れ鉄道で原隊の

いた横芝に帰り、飛行場の指揮所傍らの広場で園田隊の解散式を行った。終戦の時の心境をという命題だが、隊長に総てお任せし言はれる通り行動したと記憶している。

敗戦を知ったとき

陸軍曹長 岩崎 節夫
アルバムの中から一枚の写真が出て

来た。その写真の裏に、俺の死ぬ日は昭和二十年八月二十一日二十一時三十分。俺の死ぬ場所は、マリアナ諸島第二アスリート飛行場。俺の所属は天雷特別攻撃隊剣隊。俺の法名は、抜勝院征空義報居士。と記されていた。その写真は北海道在住の新聞記者で「皆様の中で北海道出身の方は居ませんか？」と大きな声で探していましたので、私は手を挙げて「ここに居るぞ」と合図をした時に写して頂いたものでした。その記者の曰く「後に続く若者のために是非辞世の詠を」との申し出があり

股肱我 撃って撃って撃ちまくり
斬って斬って斬りまくり
玉と砕けて君に報いんと答えた事を思い出しました。

八月十五日朝重大放送が正午頃にあるとの事で全員単独の軍装で整列をし

て聞いたが、意味が全く不明で良く聞きとれず、暫らくして停戦の命令が届き、一同身体全体の力が抜けた思いがしました。全く考えられない出来事で考える力も歩く力も無く暫らくは騒然とした中で時間が過ぎたように、今思ひ出されず。大日本帝国の軍人として急に停戦だ、終戦だ、と言われても永い間の習性で一般の社会人になれと言われても中々従属する事が出来なかったのも事実です。

涙の出る程口惜しかった事、奥歯を強く噛んで我慢をしたあの時の事を考えると夢のような想い出が彷彿として浮んで来ます。終戦が八月十五日、我等が特攻隊員として玉砕するのが八月二十一日、僅か六日の差で生きているのが不思議とも考えられます。軍隊ではなく連隊であったと今更乍ら回顧しています。戦死された諸英霊に対して着剣！捧げ銃をして終ります。



三、義烈空挺隊不時着 生き残りの者

挺進第一聯隊に戻り前述の天雷特攻隊に編入された者もあったが、それ以外は特攻隊員ではなかった。その人達の心情の一端をみる。

これについては私が原書房から出した「帰らぬ空挺部隊」という本があるので、該当部分を引用してみる。

八月十五日の停戦命令、これは落下傘部隊の将兵にとって、正に晴天の霹靂だった。

停戦とは敗戦降伏を意味するということが、暫し理解できないほどであった。

原子爆弾を投下され、ソ連の参戦をみるに至っては、戦勢挽回が覚束かないことは、誰の目にも明かである。

が、一矢も報いずして、降伏とは。茫然自失の態だった。

勝つ見込みがないと感じていながら、負けることを予期してはいないとは、愚なことだが、究極は、己の生命と国家とが共に消滅してしまうのではないかというように、漠然と考えていた。

従って敗戦に対処する心構えなどというものは、誰にもできていなかった。

——死なば死ねとだに存ずれば、何事も大事なし、

奥山隊不時着組の某小隊長は、この心境に達していると自ら信じていたが、敗戦という予期しない大事の来襲に狼狽した。

(突入した部下は、どのように戦ったであろうか？奥山隊長の最後は？)

あれこれ思い廻らし、悶々としていたが、ある日、唐瀬原基地の北方数十キロ門川という町に、死者と話をすることのできる老婆がいると聞き、藁にすがる思いで、その門を叩いた。

そこには二、三人の先客がいた。終戦直後の事で、戦地にいる息子の安否を尋ねる人達だった。

やがて順番がきて、用向きを聞いた老婆は、小隊長を一室に招き入れた。敷居を隔てた薄暗い奥の間に祭壇がある。

老婆は端座し一心不乱に祈禱する。その声は次第に昂じ、激し、鬼気迫るものがある。小隊長も初は好奇心で見ていたが、いつしか霊界に引き込まれるような気になった。

かくするうちに、老婆の体は二、三回跳躍し畳の上に倒れ暫し絶句した。やがて平静に戻り、後方を向いて坐り直して言う。



「貴方の部下の方々は立派に戦いました。最後までよく戦いました。心残りはないと申されました」
 「それでは奥山隊長は？」
 老婆は暫く黙っていたが、
 「隊長さんは残念なりと一言申されました」
 小隊長は万感胸に迫って立てず、同行した同僚に扶けられ、涙を払いつつその場を去った。
 残念なりとは何を意味するのか。
 自己の生死は意に介せず、時には事の成否すら限中ないほど達観し切っていた隊長が、死してなお、残念なりと言われるのは何であろうか。
 力尽きて戦争に敗れたことか、はた又、既に現れ始めている戦後の風潮を指すのか。
 奥山の霊は
 ——自分は幼年学校以来の諸上司の

教を守っただけのこと、その自分に、特攻隊に指定されて半歳余、部下は一糸乱れず、つき従ってきた。日本人が抱く滅私奉公の精神こそ、この見事な行動の根底をなすものなるに拘らず、これを否定するが如き風潮が既に現れ始めている。
 これこそ残念至極。
 とても言いたかったのか。
 これから先は主題と離れるが、残った者の気持ちを偲ぶため引用する。

この小隊長ばかりではない。奥山隊の不時着組四八名は皆同じ思いだった。戦後の混乱期、乏しい食糧をリュックサックに詰め、遺族の家を尋ね廻った者も少くなかった。
 二十四歳で死んだ戦友の母親が問うた。
 ——息子の遺書には「婦人関係ナシ」と書いてありましたが、一人前の男になつたのでしょうか。
 問われた戦友は、ちょっと躊躇したが、ありのままに答え、
 ——奥山隊長の手ほどきで、
 とつけ加えた。
 ——そうですか、それを承って安心致しました。
 母親は安堵の色を浮べた。

見として托されたシャツ一枚を、遺族のもとに届けに行つた。
 そのシャツは余りにも汚れていたの
 で、洗濯をして持参した。
 それを受取った母親に
 ——息子の体のおいを残したまま
 持って来て頂けたら、
 と言われて、共に泣いたという。
 また、ある新聞記者は戦後北海道に
 帰り、西島曹長と田中伍長の遺族を尋
 ねた。
 そして翌年の五月二十四日、田中伍
 長の両親宛に書き送っている。

——思出の五月二十四日が巡って参りました。心静かに一週忌の法要を心ばかり勤めさせて頂きました。
 日々にくとくなる世の情でしょうが、御両親の御心中さぞかしとお推察致しております。今夜は小樽の西島曹長宅を訪ねて仏前に心をこめて読経して参ります。御地まで仕事や汽車の都合でお訪ね出来ぬのが残念です——
 田中伍長の郷里は、北海道も最果ての地斜里郡小清水だった。
 健軍飛行場に於ける僅か一回の出会いが、これまでに人の心を動かすとは。
 この人が篤実なのか、それとも義烈空挺隊の二人の兵士の印象が、それほど鮮烈だったためか。

不時着生き残りの
人達が立てた碑

義烈空挺隊が着陸し、一時その機能を麻痺させた読谷飛行場跡に、沖繩が日本に復帰してまもなく、生き残りの人達が「義烈空挺隊玉砕之地」と墨書した木柱を立てた。奥山隊長以下の霊がこの地に籠もっているのだという、やむにやまれぬ思いだった。
 その後多くの元空挺隊員だった戦友の協賛を得て、摩文仁の慰霊公園内に義烈と彫り込んだ大きな碑を建てたが読谷の木柱はそのまま残した。と言っても木は何年かたつと腐ってしまうので、何回か建て替えた。そして昨年コンクリーの柱にした。
 生き残りの人達も数少なくなり、生存者も活力失せたが、それらの事は空挺同志会沖繩支部の現職自衛官がやってくれている。



健軍で見送ったある報導班員は、形

ど鮮烈だったためか。

戦没空挺隊員の御霊の在すところ

田中 賢一

戦没者の御霊が靖国神社と各地の護国神社に鎮まっていることは、言うまでもないが、それ以外に慰霊碑などにも御霊が在すものと、我々は思っている。ところで、慰霊祭など行っている。ところで戦没空挺隊員の御霊の在す所の御前で我々生き残りの老兵共は如何なる気持で罷り出ているのか、僭越ながら私が祭典で奉った一文をもって御披露したい。

宮崎県川南町にある川南護国神社

ここは嘗て挺進部隊の基地のあった所で、この護国神社には挺進部隊の全戦没者と殉職者が地元の英霊と共に祀られている。例祭は毎年11月23日に行はれているが、私が奉った文の一つを紹介すれば、

『歳月の流れは止まることを知らず、戦後既に半世紀を過ぎました。

青春の思い出深いこの郷にまた参りました。夕陽沈む尾鈴の嶺、白雲流る日向の空、総てが昔と変わらぬ自然の裡に、臉に浮かぶ英霊の姿はいつまでも若く、雄叫びの声は今も耳朶に蘇ります。思えば私どもは御祭神と志を同じくしながら、いかなる星のさだ

めか今ここに老いの身を社頭にさらしております。

御祭神が身を捨てて護ろうとなさった祖国は、今や物豊かにして心貧しい世となつてしまいました。ここ川南の人の心は美しい山河と共に変わることはありませんが、東京裁判史観に汚染された要路の大官以下、御祭神の御心に背くこと甚だしいものがあります。たとえ経済の復興が成つたとしても魂の復興がなければ、祖国の前途は寒心に堪えません。私共生き永らえた者は、時弊矯正を使命と心得ておりますが、力及ばず慚愧の至りであります。しかし在野には日本人の心を堅持しておる人も少なくありません。私どもはそのような人々と手を携え、最後の炎を燃やす所存であります。

我が亡き戦友の御霊よ、地元出身の御祭神共々この山紫水明の地にお心安く神鎮まり給い、時の流れを御見守り下さい』

高野山には「空」と刻んだ簡素にして幽玄な墓がある。川南護国神社より挺進部隊戦没者の御霊を移し葬った墓所である。毎年九月下旬に墓前祭を行っているが、本年私が奉った一文、

『烏兔匆匆戦熄んで五十七年 忘れんとして忘る能はざるは 唐瀬原に武を

練りし日々 朝日に映ゆる日向灘 翠巒む尾鈴山 碧空に咲きし真白き花

お互いに若かりき 相携えて聖戦に従いしに 君は護国の神となり 我は杖曳きて墓前に額突く 臉に浮かぶ君は匂うが如き若武者なるに 我は人生の黄昏 老耄蔽うべくもなし

顧みるに パレンバン作戦は眩いばかりの勝利なりしも 蒲生中尉以下三十七柱を亡しし レイテ作戦に於いては 高千穂部隊の名を戦史に残せしも 聯隊長白井中佐以下七百数十柱を 靖国の神と祀りぬ

花負いて空うち征かん雲染めん かね悔いなく我等散るなり 南サンフェルナンドの宿舎の壁に書いて征かれしは どなたなりや

ルソン ネグロスの戦場で 数多の落下傘隊員や滑空隊員が国に殉じぬ 更に口惜しきは 空母雲竜にて海没せし面高少佐以下なり 飛行部隊にありては筒井大尉以下の精銳が 雲の彼方に消え失せぬ

掉尾を飾る壮挙は特攻義烈空挺隊にして よしや身は千々に散るとも来る春 また咲き出ん靖国の宮

あなたの方の心根は 我が肺腑を穿つものあり (関三郎軍曹)

翻つて我が国の現状を見るに 東京裁判史観に眩惑せられ 大東亜戦争の意義を歪曲し 引いては英霊の祭祀を怠るに至る 靖国神社参拝につき右顧左

眊 政治外交の具にするが如き 正に独立国の態をなさずというべし 国家百年の計なく 党利党略私利私欲の政治家に 英霊の御心を以って芝蘭の化となすは 容易ならざるも これなくして民族の繁栄期すべからず 経済の

復興の如き檣花一朝の夢に過ぎず かくの如き無理想猥雑の世となりしは一に戦後の教育にあり 現下の義務教育に用いる教科書に 英霊の偉勲を讃えるが如き記事絶えて見ず吾人の憂憤これに過ぐるものなし

我等英霊と共に抱きし志 今なお堅持しあるも 既に頽齡にして残齡少しここに掉尾の勇を揮いて 英霊の偉勲を顕彰せん これ最大の慰霊なりと心得あればなり 鬱せあれ

歴史漂う高野の聖地に心閑かに霊鎮まり給え 幽明の境除かるこの庭で 君は若武者我は老耄

富む春秋国に捧げし友垣に 済まぬ思いの八十路かな